

平成 22 年 4 月 26 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19710224
研究課題名(和文) アメリカの日本占領とせめぎ合う家族イデオロギー

研究課題名(英文) The Ideology of Family and Marriage in the US Occupation of Japan

研究代表者

豊田 真穂 (TOYODA MAHO)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：20434821

研究代表者の専門分野：ジェンダー史

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：ジェンダー史 / 日米女性史 / 家族 / 日本占領 / アメリカ

1. 研究計画の概要

(1)本研究の目的は、「家族」をめぐるイデオロギーに焦点を当てることで、アメリカ占領下の日本における「女性解放」政策の歴史的意義を再評価することにある。その際、家族と生殖に関する諸法律や政策を検討することによって、占領下でどのような「家族」像が規定されていったのかを検討する。戦後すべての制度は、その家族イデオロギーを前提として組み立てられてきたのであり、その意味でこの時期に策定された「家族」のモデルを明らかにすることは重要である。

(2)本研究においては、占領期を日米の家族観やジェンダー観がせめぎ合う場としてとらえ、人口政策と性・生殖のコントロールという観点から家族政策を考察し、どのような家族観が前提となって、改革として結実したのかを実証的に探る。

2. 研究の進捗状況

(1) 占領下で制定された憲法が、どのような「家族」像を設定してきたのかを女性労働問題に注目して探った。女性の労働に注目するのは、女性の役割があくまで家庭にあると前提されているなら、家庭の外に働く女性労働者に対する政策の方向性は、おのずと決まってくるからである。そのため、憲法改正を審議した帝国議会の議事録を調査し、また制定時の憲法解釈がいかにその後の政策のなかに波及していったのかを、日本立法資料全集『労働基準法』に依拠して明らかにした。その結果、表面的には女性のためになるような条項が、実際には「近代家族」イデオロギーを法制化していった経緯が明らかになった。また、憲法 24 条の「両性の本質的平等」と

いう規定こそが、差異を認めつつ男女を平等に扱うことを許容し、そこから「合理的な差別」を認めることにつながったことを明らかにした。

(2)アメリカの産児制限運動家であるマーガレット・サンガーの来日禁止をめぐって占領下で激しい議論が見られたことを中心に、それを占領下の人口政策全体の中で位置づける作業を行った。そのために、米国国立公文書館所蔵の連合国最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP) 文書 (マイクロフィッシュを国立国会図書館憲政資料室が所蔵) や、スミス・カレッジ所蔵の「マーガレット・サンガー文書」(マイクロフィルムを関西大学図書館が所蔵) を調査・分析した。その結果、バースコントロールという私的であるはずの行為が、政府によって公的なものとされていった過程や、さらにそれを占領軍やアメリカ側が支持し援助していたのにもかかわらず、公表することを執拗に避ける方針が採られたことを明らかにした。

(3) 日本のバースコントロール運動にとって大きな転換点となった国際家族計画連盟 (IPPF) の第 5 回会議は、アメリカ人慈善活動家でバースコントロールの推進のために世界規模での寄付をしたクラレンス・ギャンブルの功績によるものとされてきた。そこで「クラレンス・ギャンブル文書」のあるハーヴァード大学医学部図書館において資料調査を行った結果、戦後日本のバースコントロール運動が、ギャンブルの関与を積極的に促したことによって、人口コントロールと優生学という隠された課題を進めることになったことを明らかにした。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
(理由)

本研究の課題であるアメリカ日本占領期における家族イデオロギーは、研究を進めるなかで浮き彫りになったアメリカ人慈善活動家でバースコントロールを推進したクラレンス・ギャンブルに注目することで、明らかになってきたといえる。というのも、ギャンブルは1930年代に福祉費の増大を懸念して、貧困層や移民たちにバースコントロールをすすめる活動をしていたが、第二次世界大戦後の占領期からその後にかけて、日本やアジア諸国に活動の拠点を移した。ギャンブルの活動をみることは、かつて自国内の「貧民」や「不適者」に向けられていた優生学的なバースコントロールのまなざしが、海外の非白人世界に向けられたひとつの例と捉えることができるからである。ギャンブルの例は、白人ミドルクラスの理想とする「家族像」の日本への輸出といえるからである

4. 今後の研究の推進方策

(1) 今後は、白人ミドルクラスの理想とする「家族像」の日本への輸入という側面から、クラレンス・ギャンブルやGHQ/SCAPのクロフォード・サムスといった人物に焦点を当てながら、占領下でどのような「家族」像が理想とされていったのかを、人口政策と性・生殖のコントロールという観点から検討する。
(2) 占領下の家族イデオロギーを解明するにあたり、当初の計画では、家族の範囲を画し、構成員の相互権利義務関係や対外的代表関係、ひいては男女(夫と妻)の市民としての権利と義務を規定する民法・戸籍法にも焦点をあてる予定だったが、政府文書の国立公文書館所蔵「臨時法制調査会関係資料」や国立国会図書館憲政資料室所蔵の司法省終戦連絡事務室「民法改正に関する総司令部係官との会談記録」などを調査では、日本女性団体の資料が不足し、一方、市川房枝記念館(婦選会館)所蔵資料が一時的に閉鎖されていたことから、今後は、性・生殖のコントロールという観点から家族イデオロギーを明らかにすることを課題としたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 豊田真穂「戦後日本のバースコントロール運動と第5回国際家族計画会議—クラレンス・ギャンブルの関わりを中心に—」『ジェンダー史学』第6号(2010年)査読有
- ② 豊田真穂「アメリカ占領下の日本におけ

る人口問題とバースコントロール—マーガレット・サンガーの来日禁止をめぐって—」『関西大学人権問題研究室紀要』第57号1~34頁(2009年)査読無

[学会発表] (計6件)

- ① Maho Toyoda, “American Intervention in Postwar Japanese Birth Control Movement: The Case of Clarence J. Gamble,” Session 22 “Postwar Social Movements across Japan and the United States: Connections and conflicts,” The Thirteenth Asian Studies Conference Japan, June 20, 2009, Sophia University
- ② 豊田真穂「占領下の性・婚姻・家族をめぐるせめぎ合い」占領・戦後史研究会2008年度第1回研究会2008年4月5日於二松学舎大学九段キャンパス

[図書] (計2件)

- ① 豊田真穂「アメリカ占領下の日本における性・生殖・人口のコントロール」有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』(青木書店、2010年)291~297頁。
- ② 豊田真穂「憲法が設定する『家族』」同時代史学会編『日本国憲法の同時代史』(日本経済評論社、2007年)147~177頁。

[その他]

ホームページ

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~maho/toyoda/Profile.html>